

聖書：ピリピ 4：8～9

説教題：平和の神がともに

日時：2017年5月7日（朝拝）

8節、ここには私たちが心に留めるべきいくつかの素晴らしい徳目が整然と並べられています。「すべての真実なこと」「すべての誉れあること」「すべての正しいこと」「すべての清いこと」「すべての愛すべきこと」「すべての評判の良いこと」。全部で6つです。そしてその後、「そのほか」と言われてさらに二つの言葉が記されています。一体これらは何でしょうか。日本語で読んででもそう感じる方もいらっしゃると思いますが、注解者たちが指摘するように、これらはパウロが他の手紙ではあまり使っていない言葉です。ここにしか出て来ない言葉も含まれています。そして興味深いことは、これらは当時の一般社会における道徳的な徳目であったことです。それらがここに並べられているとはどういうことでしょうか。パウロはキリスト教福音だけではなく一般社会で良しと認められていることにも気を配って、それらを尊ぶようにと言っているのでしょうか。さらに言えばピリピ教会の中には福音の教えだけを大事にして、異邦人世界が良しと認める道徳を大事にしない人たちがいて、その誤りを訂正しようとしたのでしょうか。別な言い方をすれば、一般社会に見られる神の一般恩恵の働きを正しく認めて、それを正当に評価するように！そうして周りの人たちからも良い評価を勝ち取るように！ということを念頭に置いていたのでしょうか。確かにこれらは当時の世の中でよく使われた言葉なのでしょう。しかしキリスト教の立場から言えば、それが良いものであれば世と同じように良いと認めても何の問題もありません。世界に存在するすべての良いことは神から発しています。この世に見られるすべての良いことの源は神ご自身です。ですからその良いことを、それは良いものだと思えることはクリスチャンにとって良いこと、またそう告白すべきことです。しかし私たちはそのあまり、ここでパウロがこの世に迎合しようとしたかのように見る必要はないと思います。あるいは異邦人世界における道徳的に立派な人たちを認めて、彼らを尊敬・評価し、価値観を共有できる場所は共有して一緒に歩みましょう！というようなことを言おうとしたのでもない。クリスチャンは世の道徳観から学んで世の考えに合わせるのではなく、すべてを神の基準によ

って考えなくてはなりません。3章20節で「私たちの国籍は天にある」と言われました。ですからパウロがここで当時のギリシャ世界でよく使われた言葉を用いたとしても、当時の人たちの考えに沿ってそれらのことを考えるのではなく、やはり神の基準に立ち返り、天の視点で再定義して、その良いことを心に留め、尊ぶようにと述べていると考えられます。

ここに6つの徳目が並べられていますが、これら一つ一つに詳細な意味の違いを求めるより、全体として何を言っているかを理解することに重点を置く方が良いと思います。一応一つずつ簡単に見て行きますと、一つ目の「真実なこと」とはウソがないこと、本当のこと、信頼できることなどでしょう。二つ目の「誉れあること」とは気高いこと、尊敬すべきこと、高貴なこと。三つ目の「正しいこと」は文字通り、広い意味での正しいこと全般。4つ目の「清いこと」とは道徳的、宗教的に汚れないこと、純粋なこと。5つ目の「愛すべきこと」とは魅力的なこと、美しいこと。6つ目の「評判の良いこと」とは人からの良い評価を勝ち取るようなこと、また欄外にあるように「良いと言われるもの」のことでしょう。そしてこれだけですべてを言い尽すことはできないので、パウロは「そのほか」と述べて、もう二つのことを加えて、まさにすべての良きこと、すぐれていることを！ということです。

これらのことに「心を留めなさい」と彼は言います。私たちが何に自分の心を留めるかという問題は実は大きな問題です。私たちの外側に現れ出てくる様々な言動は、私たちの「心」から出て来るとイエス様は言われました。ルカの福音書6章45節：「良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。」つまり私たちが普段から悪いものに心を留め、悪いものばかりを見、それらで心を一杯にしていると、そういう人間になる。反対に良いものに心を留め、良いものに注目し、良いもので心を満たしていると、その心にあることによって私たち自身が造り変えられ、そういう人間になる。私たちは果たして日頃、何に心を留めているのでしょうか。悪いものを心に取り入れないようにすることはもちろんですが、それだけでは不十分です。パウロはここで積極的に良い

ものに心を留めよ！と言っています。すべて真実なこと、すべて誉れあること、すべて正しいことなどに関心を抱け！それらに心を用いよ！そうすることが祝福された信仰生活のカギになることだと言っています。

さらに 9 節でパウロはこう続けます。「あなたがたが私から学び、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。」こちらではパウロから直接あるいは間接に学んだ福音の教え、またパウロの模範にならうようにとされています。この 9 節と比べることによって、8 節の内容は単なるこの世の道徳観を指しているのではないことが分かります。8 節と 9 節は同じレベルのことを述べていると思われます。ですから 8 節の内容はこの世の基準で考えるべきことではなく、神の基準に沿って考えられるべきことです。そしてそれと並んで 9 節ではパウロから学んだ福音の教えと彼の模範に心を留めるように！とされているのです。

そして 9 節で特に言われていることは、それを「実行せよ！」ということです。心に留めるばかりでなく、それを行なうということです。これは今日の御言葉の中で特に重要な部分です。そのことは 9 節後半を見ると分かります。「そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。」 「そうすれば」とあります。すなわちこれは平和の神がともにいてくださるための条件であるということです。従ってここでパウロが勧めていることを実行しなければ、この祝福は得られない。これを行なう者に 9 節最後の約束は成就するのです。

この 9 節後半の約束、「平和の神がともにいてくださる」という祝福ほど、私たちがあらゆる場合に必要としているものは他にあるでしょうか。私たちの地上の生活には色々なことがあります。しかしそこにもし神がともにいてくださるなら私たちは安心です。何も恐れることはありません。詩篇 23 篇の作者も「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが」と言いました。なぜなら「あなたが私とともにおられますから」と。ヘブル書 13 章 6 節：「主は私の助け手です。私は恐れませんが。人間が、私に対して何ができません。」 しかもともにいてくださるのは平和の神で

す。聖書における「平和」とは争いがないことばかりでなく、あらゆる祝福を意味する言葉です。すなわちあらゆる祝福を持ちたもう神、そしてそのあらゆる祝福で満たしてくださる神がともにおられる。これほど素晴らしいことは他にあるでしょうか。

この神の臨在の祝福に生きるためには、先に見たことを心に留め、また行なうことが必要です。これは私たちの良い行ないが功績となって神の祝福を勝ち取るという意味ではありません。先に8節で見たことは神の基準に照らしてもう一度考えるべきことだと申し上げました。すなわちそれらに心を留めるとは、神が良しとされることに思いを巡らして歩むことであり、言い換えれば神とともに歩むことです。神との親しい交わりの内に歩むことです。そうする人は当然、神がともにいてくださる祝福をいよいよ体験することになります。そしてこれは実行する生活とも関係します。聖書はこのことについて一貫しています。ヤコブ書1章22節：「また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。」2章17節：「それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。」またイエス様も山上の説教の最後を、岩の上に自分の家を建てた人と砂の上に自分の家を建てた人のたとえで締め括られました。そのポイントは、御言葉を聞いても行なわない人は砂の上に家を建てた人のように洪水の日には倒れてしまう。だから御言葉を聞くだけでなく、行なわなければならないということです。ただ聞いて頭で理解するだけでなく、実行する歩みにおいて、私たちは真に神に頼り、神との生ける交わりの内に歩むのです。その歩みを通して、その人はいよいよ神がともにいてくださるとはどういうことかを体験し、実感し、それを味わい、その他の時にもそのことを確信して歩むようにと導かれるのです。ですから反対から言えば、そのような歩みをしなければ神がともにいてくださる祝福を知ることはできません。8節で言われたように神が良しとされることに思いを巡らさず、言わば神との交わりを大事にしないで歩んで来たのに、苦しい時になって神の臨在の祝福が欲しいと願っても、それは無理です。また御言葉を聞いてもそれを行なう歩みをして来なかったのに、すなわち神とともに歩む生活を大事にして来なかったのに、何かの時に突然「神様、私と一緒にいてください」と言っても、急にはそのような祝福には歩めません。私たちは自分の歩みを振り返ってどうでしょうか。

9 節後半の祝福は、私たちにとって何にもまさる祝福だと思います。私たちは色々な困難にぶつかって神の助けが欲しいと思います。思っても見なかった困難に囲まれた時、病気の時、死の床にある時、一人で色々な問題にぶつからなければならない時、平和の神が私とともにいてくださるということ以上の祝福があるでしょうか。また危急の時ばかりでなく、何事もない平穏な毎日においても、この神がともにいてくださることを知る歩みほど幸いなことはないのではないのでしょうか。その祝福に生きるためにパウロは勧めています。「すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、賞賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。」と。また「あなたがたが私から学び、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。」と。この御言葉を心に刻んで、私たちは日々、自分は何に心を留めて歩んでいるのか、自分の生活を見直したいと思います。そして神の前で真実なこと、清いこと、賞賛に値することに心を向け、それで心を満たす者になりたいと思います。自分の心の倉を神の御心にかなう良いことで満たす者になりたいと思います。そしてパウロが伝えてくれた福音と良き模範にならって、私たちもそれを実行する歩みへと進むことができますように。そうする時にこの偉大な祝福が私たちに約束されています。「そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。」